2 春のクリーンデー

ゆり子は、友達と公園でよく待ち合わせをする。新緑がまぶしい中、その日も、同じクラスの洋子や真理と、いつもの公園に集まった。

「いやねえ。またごみが散らかっていて。」

ゆり子がうんざりしたように言った。

「ごみが散らかっていると、気分も悪くなるね。」

洋子の言葉に、ゆり子も真理もうなずいた。

「このごみ、なんとかならないのかなあ。」

ゆり子が言った。

「このままじゃよくないと思うけど、だれが捨てているのかわからないし、わたしたちが考えてもしかたないよ。」

真理の言葉からは、あきらめたような気持ちが伝わってきた。

「そうだよね。行こうか。」

ゆり子は、散らかっている食べ物のふくろや空きかんに目をやりながら、公園を出た。

数日後、ゆり子は、母から「春のクリーンデー」にさそわれた。

「春日部市ではね、『彩（さい）の国ごみゼロ県民運動』の一つとして、五月三０日（ごみゼロ）前後の日曜日に、市内の各地区でいっせいに清そう活動をするのよ。お母さんは毎年参加しているの。一人でも多く参加してほしいから、今年はゆり子も行かない？」

「えーっ、せっかくの日曜日だよ。習い事の予定もないから、友達と思い切り遊ぼうと思っていたのに。」

「以前、ゆり子は公園のごみの話をしていたでしょ。一人でそうじをするのは大変だけど、みんなでやれば、あっという間に終わるわよ。」

ゆり子は、公園に散らかったごみを思い出していた。（たしかにごみが散らかっているのはよくないと思うけど……。なんでわたしが休みの日に、わざわざ出かけて行かなければならないのよ。）ゆり子の気持ちの中に納得できないものがあった。

「それに、年に一度のことよ。よく行く公園でしょ。自分たちが使う場所は、自分たちできれいにしなくちゃ。」

（それはそうだけど……。仕方がない。一人ではいやだから、洋子や真理もさそってみようか。）ゆり子は、母にさそわれるままに、しぶしぶ参加することにした。

日曜日の朝、いつもの公園に行くと、すでに近所の人たちが集まっていた。洋子と真理も来てくれていた。

「おはよう。けっこうたくさんの人たちが参加しているんだね。」

ゆり子には、休日にもかかわらず、多くの人が参加していることが意外だった。

「やあ、ゆり子ちゃん、おはよう。初参加だね。今日はがんばろうね。」

「は、はい。」

近所のおじさんが、笑顔で声をかけてくれた。ゆり子は少し照れくさかった。

みんなで公園のごみを拾い始めた。参加している人たちは、みなだまって作業をしている。（みんな自分の家の庭でもないのに、公共のために一生けん命そうじをしている。）ゆり子は、仕方なく参加していた自分が少しはずかしくなった。

いっしょに作業をしていた近所のおじさんが、

「この公園はね、クリーンデー以外にも月に一度、自治会の人たちが集まって、清そう活動をしているんだよ。みんなが使う場所が、よごれたままではよくないからね。」

と教えてくれた。

「ええっ、そうだったんですか。」

洋子や真理もおどろいていた。

「今までわたしたち、公園がきたないって文句（もんく）を言っているだけだったね。」

もうしわけなさそうに真理が言った。

「そのとおりだわ。」

ゆり子も同じ気持ちだった。

作業が終わり、たくさんのごみが集められた。

「とってもきれいになったわね。みんなのおかげよ。」

「お母さん、わたしクリーンデーに参加してよかった。地域（いき）の人たちにお礼を言いたいわ。今度また三人で、月に一度の清そう活動にも参加してみようよ。」

ゆり子の言葉に、洋子や真理も大きくうなずいた。

ゆり子には、公園の木々の新緑が、いっそうまぶしく感じられた。